議案第２０号	文化財の県指定について

１　提案理由

平成２１年３月２６日に石川県文化財保護審議会から文化財の県指定について答申があったため

２　根拠法令

石川県文化財保護条例第３１条第１項

３　指定内容

史跡名勝天然記念物

種　　別	名　　称	員　数	所　　在　　地	所 有 者
史　跡	北国街道倶利伽羅峠道	―	河北郡津幡町字竹橋な部７５番地　外１２筆 河北郡津幡町字竹橋、下中、原、上藤又地内　町有無番地	津幡町
天然記念物	ホクリクサンショウウオ生息地	―	羽咋市千路町子７番　外９筆 羽咋市千路町地内　市有無番地	羽咋市 山崎登喜子 幸正笑美子 浜辺国紀
天然記念物	平等寺のコウヤマキ	1本	鳳珠郡能登町字寺分弐字１１４番	大字寺分共有

４　指定の日

県公報の告示があった日とする

北国街道倶利伽羅峠道

種　別　　史跡・名勝・天然記念物（史跡）

所在地　　河北郡津幡町字竹橋な部７５番地　外１２筆

　　河北郡津幡町字竹橋、下中、原、上藤又地内　町有無番地

所有者　　津幡町

概　要

江戸時代の北国街道は、古代律令制で確立した、日本海沿岸を経て東北に至る主要幹線道「北陸道」に端を発しており、「北陸道」、「北国路」、「北国往還道」とも呼ばれる。

北国街道倶利伽羅峠道は、古来から加賀、越中の国境に位置する交通の要衝として知られる山越えの道であり、竹橋宿（津幡町字竹橋）から森村(同字山森）、倶利伽羅村（同字倶利伽羅）を経て、富山県小矢部市石坂、埴生に至る経路をとる。そのうち、現在、津幡町道竹橋倶利伽羅線の一部となる、竹橋集落の東側約１キロメートルの地点から山森集落の西側約７００メートルの地点までの延長約１．９キロメートルの尾根伝いの道は、大規模な道路の拡幅や路面舗装がなされず、また、尾根筋には切り通しが良好に残るなど、江戸時代の街道の原状を良好に保っている。

県内の北国街道が、明治時代以降の道路の拡幅や路面舗装により、延長約７５キロメートルの大部分が大きく変容する中で、この延長約１．９キロメートルの道については県内で最も長い経路で江戸時代の街道の姿を良好にとどめるものである。これは、明治１１（１８７８）年に天田峠を越える新道が建設され、交通の要衝の役割が移動したことによる。

このように北国街道倶利伽羅峠道は、県内で最も長い距離で江戸時代の街道の原状を保った貴重な道路遺構であり、その文化財的価値は高く、史跡に指定し、その保存を図ることが必要である。

北国街道俱利伽羅峠道位置図（S=1/25,000）

河北郡津幡町字下中地内

河北郡津幡町字上藤又地内

北国街道倶利伽羅峠道

ホクリクサンショウウオ生息地（せいそくち）

種　別　　史跡・名勝・天然記念物（天然記念物）
所在地　　羽咋市千路町子７番　外９筆
所有者　　羽咋市、山崎登喜子、幸正笑美子、浜辺国紀
概　要

ホクリクサンショウウオは、サンショウウオ目サンショウウオ科に属する日本固有の小型のサンショウウオである。

能登半島と富山県の一部にのみ分布する。生息地は、丘陵部の林縁に接して滲みだし水や湧水によってできた緩やかな流れとその周辺である。国のレッドリストで絶滅危惧 IB 類（EN）、県のレッドデータブックでは絶滅危惧Ⅰ類に分類されている。

成体の全長は８０～１２０ミリメートル、尾長は全長の約半分、前肢の指は４本、後肢の指は５本である。オスはメスよりやや大きく、メスに比べて尾長が長く、後肢が太くなっている。背面はオスでは黒褐色、メスでは黄褐色で不明瞭な斑紋を散布する。

繁殖は年１回、１月下旬から４月上旬にかけてで、メスは１対の卵嚢を産む。卵嚢表面に明瞭な条線を持たないことで近縁種から区別できる。

本種は、昭和４６年に、羽咋市立旧越路野小学校敷地内の側溝で発見された。当初はアベサンショウウオ（*Hynobius abei*）あるいはトウホクサンショウウオ（*Hynobius lichenatus*）とされていたが、形態的並びに遺伝的研究の結果、独立した新種であることが判明し、昭和５９年に「ホクリクサンショウウオ（*Hynobius takedai*）」と命名されたものである。両生類のような高等動物の新種発見は近年では珍しく、羽咋市千路町地内の生息地は、そのホクリクサンショウウオのタイプ産地として学術的に貴重であり、その文化財的価値は高く、天然記念物に指定し、その保護を図ることが必要である。

ホクリクサンショウウオ生息地位置図（S=1/25,000）

ホクリクサンショウウオ生息地

ホクリクサンショウウオ

ホクリクサンショウウオ生息地

平等寺（びょうどうじ）のコウヤマキ

種　別　　史跡・名勝・天然記念物（天然記念物）
員　数　　１本
所在地　　鳳珠郡能登町字寺分弐字１１４番
所有者　　大字寺分共有
概　要

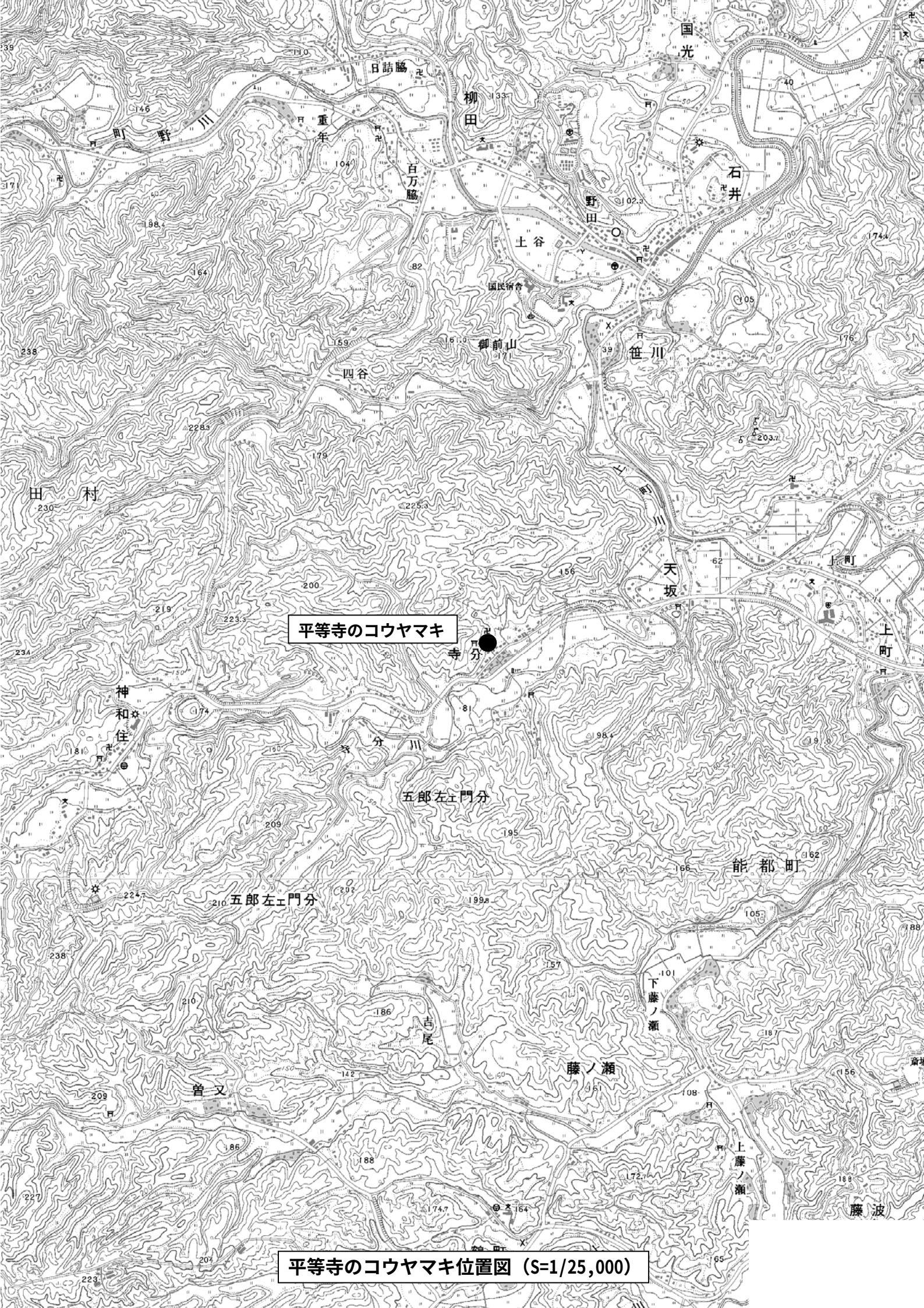
コウヤマキは、１属１種の日本固有の植物で、常緑高木針葉樹である。幹は直立し、樹高３０メートル以上、幹周(胸高)３メートルに達する。福島県から宮崎県までの山地に分布している。高野山に多いので「高野槇」と名付けられた。

樹皮は、若枝では赤褐色であるが、後に灰褐色に変わる。枝は一見して先端に葉が輪生しているように見えるが、実際には長枝と短枝があり、長枝には褐色の鱗片葉が螺旋状につく。短枝は長枝の節に多数輪生し、その先に長さ６～１４センチメートルの針葉をつけるので、長枝の節部に葉が輪生しているように見える。

コウヤマキは、かつてヨーロッパや北アメリカにも広く分布していたことが化石でわかっているが、北アメリカからは新第三紀に、ヨーロッパからは第四紀更新世の始めに滅びた。現在では日本にのみ残存しており、植物学上貴重な樹種である。

平等寺のコウヤマキは、樹高３０メートル、幹周(胸高)３．８メートルを測り、平等寺が現在地に移転した、天正１１(１５８３)年頃に植えられたものとすると、樹齢は約４００年と考えられる。平等寺が真言宗であるため、高野山にゆかりが深いコウヤマキが植えられたとされている。

コウヤマキとしては県内最大の巨樹で、その文化財的価値は高く、また、年輪等に過去の気候や環境の状況を記録していることから古気象等の研究素材として学術的価値も大きい。さらに地域のシンボルとして人々の安らぎと潤いを与えるなど、生活環境保全面からも重要な自然環境資源であり、天然記念物に指定し、その保護を図ることが必要である。



平等寺のコウヤマキ位置図（S=1/25,000）

平等寺のコウヤマキ